

もつぷるNO.0

# 赤色救援会の 復権に向けて

★もつぷる社事務局

△赤色救援会の復権に向けて▽ 目次

- ★革命戦争と我々・・・・・・・・・・・・・ 2
- ★救援運動と我々・・・・・・・・・・・・・ 6
- ★発足に当っての原則・・・・・・・・・・・・・ 10
- ★資料「解放運動犠牲者救援会  
第二回全国大会宣言」・・・・・・・・・・・・・ 11

## ★革命戦争と我々

「我々は戦争消滅論者であり、戦争を必要としない。だが戦争を消滅するには戦争を通じる他はないのであり、鉄砲を不要にするには、鉄砲を手にしなければならぬ」(毛沢東)

戦争が開始された。戦争を消滅するための戦争が開始された。この地上から一切の殺りくと惨事を消滅するための赤い戦争が開始された。

インドシナの兄弟たちの鮮血に呼応し、ラテンアメリカの兄弟たちの銃声に呼応し、そしてアラブの砂漠にまいる硝煙に呼応し、日本の人民が、人民の軍隊を先頭にして、この日本の地で赤い戦争を開始した。

過去数百年にわたって武装解除され、惨めつたらしい程に負け戦に馴らされていた、我々が父や母の、我々が

過激派」と称して、狂気の如き弾圧により抹殺せんとする敵の手からはもちろん、「出る釘は打たれる」式にうそぶくことで積極的にも消極的にも黙殺せんとする一部「新左翼」の手からも含めて、全ゆる敵対と妨害の手から、断乎としてそれらを防衛し、且つ援護射撃することを自らの最大の任務とするものである。

冷徹たる劣勢を、現実の武装解除を、観念のマスターベーションによって曖昧化し延命せんとする人々。あるいは「戦後民主主義の反動化」として、文化運動やら人権運動、護憲運動に平板化せんとする人々。我々はそうした人々の傲慢なる空念仏を容認することは出来ない。敵に対しては全く武装解除し、他党派との矮小なつばぜり合いの如き「内ゲバ」に明け暮れる人々。我々はそうした人々を哀れに思う。

一方、この間の「赤軍兵士」と「反米愛国戦士」(日共革命左派)等を始めとする武装主体の大同団結の方向は何とすばらしいことだろう。この大同団結こそ、安保ブンド誕生以降、この一〇余年の苦闘を経た日本階級闘争の最大の成果であろう。そして、こうした大同団結の方向こそ、旧来の頭でっかちな、「統一戦線論」に代り真に、実践の中から人民内部の矛盾を正しく解決するものであるだろう。我々は、彼らの実践の中から、謙虚に

兄弟の、そして我々が友や、我々が恋人の一切の怨念を背負い、全世界の兄弟たちの限りない愛情に包まれて、日本の人民が今や反撃の烽火をあげた。

全世界を網羅する赤い戦争、人民の戦争—世界革命戦争万才!

我々は、人民の軍隊、及びその兵士を支持し、支援するための人民による、人民の救援会—赤色救援会である。

我々は、六〇年代後半の「反戦反安保」なる大衆的実力闘争の昂揚が、一〇・八羽田に結集した一握りの「暴徒」によって開始されたことを知っている。そして、それ以降、所謂「新左翼」勢力として、その戦闘性とその真摯な姿勢を以って、量的にも質的にも拡大した運動が昨今、大きく分解しつつあることを知っている。そして又、その分解の中から、一片の薄気味悪さを呈しつつも、そして、はがゆい程の未熟さを伴いつつも、何かしら底知れない程の強烈な魅力をもった新しい運動が、そして新しい運動主体が誕生しつつあることを知っている。

我々はこの新しい運動とその新しい運動主体こそが、かつての羽田の「暴徒」がそうであったように、明日の世界を切り開く鍵であると確認するが故に、それらを「

多くのことを学ばなければならない。

我々は、かつての戦前治安維持法下で、熾烈な闘いを展開した旧日本赤色救援会とその活動家諸氏の比類なき戦斗性とその献身性に対し、限りない敬意を表するものである。

我々はヒステリックにも「反スタ」をがなりたてることで自らを免罪せんとする人々よりも、たとえ「スターリニスト」と称されつつも苛酷なる白色テロルの下に熾烈な闘いを展開した人々の内に、より生きた教訓を導き出し得るであろう。

旧日本赤色救援会は、一九二八年、「解放運動犠牲者救援会」を前身として出発し、それを前後した三・一五、四・一六の日本共産党中央部への総弾圧を経る中で、暴れ狂う白色テロルとファシズムの嵐に抗すべく、一九三〇年、コミンテルンの指導下にあった国際赤色救援会に加盟することで、名実ともに、日本赤色救援会として再組織された。それ以降「救援活動を通じての国際的連帯」が運動方針の中心に掲げられる等、敵に対する反撃と味方労働大衆への多大な鼓舞としての意味を果たさんとした半面、対権力攻防上の受動性の表現として、又半ば居直りの表現として、自らを「左翼組織」であり、所謂「コミンテルン—日本共産党の別動隊」であることを公然

化しつつ、実質的には、救援会本部に対し治安維持法による弾圧が加えられる等、ますます狂暴化する白色テロルの前に潰滅されていったのであった。

我々は今日の政治警察を筆頭とした弾圧の構造が、そうした戦前の治安維持法下のものに一歩も劣らない程に狂暴なものであることを、味方総体の弱さとして痛感するが故に、それが如何にその当時の諸条件からして半ば余儀なくされたものだったにせよ、そうした旧日本赤色救援会の内包していた、受動性、又閉鎖性を、「如何なる弾圧も全人民への弾圧とし……、思想的信条、政治的見解を越えて……」なる理念一般の域に非ず、実践の課題として、必ずや踏み越えてゆかなければならない。それとともに、旧日本赤色救援会のかげがえのない遺産であるところの、弾圧の集中砲火を浴びる前線との、結合に向けた不断不屈の姿勢——そして、その限らない戦斗性と献身性——を、我々は断乎として復権せしめ、且つ継承してゆかなければならない。

ブルジョアジー諸君！ そして政治警察、機動隊、自衛隊、米軍、等の白軍兵士諸君！ 並びに商業紙、自警団、防犯協会、不動産屋等のその下甸ども諸君！

かつて、治安維持法の下、諸君らの先輩が全ゆる狂暴の限りをつくした白色テロルにより解体せしめた旧日本

赤色救援会は、今ここに我々の手によって復活したことを通告する。

諸君らが「過激派ゲリラ集団」と称する「赤軍兵士」「反米愛国戦士」等は我々人民の財産であり、我々人民の生命である。

諸君らは、昨年末、我らが愛すべき「反米愛国戦士」を虐殺した。諸君らは、我らが兵士によるハイジャック作戦の成功と、それへの人民の断乎たる支持に逆上し、血迷い、我らが愛すべき「赤軍兵士」を「接見禁止等」により、今なお密室に閉じこめている。諸君らは、卑小なその下甸どもを使って、かつてのナチスの「アカ狩り」「ユダヤ狩り」の手の如き「恐怖キャンペーン」やゲリラの卑俗化、デタラメなガサ入れ、都内の喫茶店、アパート、不動産屋等の一斉総点検、果ては、白昼公然たる拉致・暴行等の白色テロルやら令状なしの「要注意人物」云々なるスパイ強要……等々、狂暴きわまる手口により、我らが兵士たちを、政治的、社会的、肉体的、精神的にも抹殺せんと血まなこになっている。

しかしながらブルジョアジー諸君！ 白軍兵士諸君！ 下甸ども諸君！

今一度言おう。諸君らが「過激派ゲリラ集団」と称して血まなこになって抹殺せんとしている「赤軍兵士」

「反米愛国戦士」等は、我々人民の財産であり、我々人民の生命である。我々は如何なる犠牲を払ってでも、我々が愛すべき兵士たちを、断乎として防衛するだろう。

さて白軍兵士諸君。ここで一片の安らぎの言葉を与えよう。諸君らが、我らが兵士たちの手により殺されたる時、諸君らの主人たちは諸君らの遺族に安っぽい勲章と少しばかりの恩給やら見舞金を出してくれるだけだろう。だが我らが赤色救援会は、諸君らの死に対し、人民葬にて心からその哀悼をささげよう。驚くことはない。それが人民の戦争というものだ。インドシナの我らが兄弟たちががそうであるように、我々は、諸君らが行うが如く、兵士の屍を粗末に扱ったりは決してしないだろうから。それに、諸君らの屍は、人民の戦争——革命戦争の総過程に於いて、最も多大なる貢献であり、人民、及び人民の軍隊への限らない鼓舞であらうから。

ブルジョアジー諸君！ 白軍兵士諸君！ 下甸ども諸君！ さあ第2ラウンドのゴングが鳴った。お互いに頑張ろう。

我々はこの自らを革命戦争勢力の一翼として、誇りをもって公然と自己規定し、宣言するものである。

革命戦争救援会 我らが赤色救援会の復活万才！

## ★ 救援運動と我々

「人民、ただ人民のみが歴史を創造する原動力である」  
(毛沢東)

今、世の中が、左翼世界が、混乱していると錯覚している、頭デッカチな人々がいる。それは、むしろ、その人々自身の頭が混乱しているのである。そういう人々はウニタ書店にでも行けばよい。多くの評論家たちが待っているだろう。いや、もっと手取り早いのは、身近にはん濫している商業紙を今一度読み返してみればよい。そう、「新左翼の分解」がどうのこうのっていった類のそれである。如何に、悪意と偏見にみちたブルジョア御用紙とはいえ、少なくとも、事実認識に付いては、ウニタ書店に居並ぶ評論家たちよりも、そして一同勢ぞろいした各党派機関紙よりも、案外より正確に、しかも下手

な言い回しを使わず、より単直に表現しているものである。

さて、事実とは何なのか。  
我々は、一般的に後退し、混乱したのではなく、確乎として前進したが故に、混乱したのであり、それ以上でもそれ以下でもないのである。我々はそうした冷徹たる地平から出発しなければならない。

確かに、この間の救援運動領域での混乱とは、周知のとうり事実である。しかしながら、それは、救援運動を利用主義的に引き回した各党派のエゴイズム故なのだろうか。又、そうした「党派エゴイズム」を包摂し得るだけの救援運動の成長が、そしてその大衆的結集が不十分だったからなのだろうか。それとも所詮は、「市民主義者」としての、「ノンセクト」としての、各地域救援会の限界性故なのだろうか。そしてそうした人々の所謂「階級意識の欠落」故なのだろうか。それとも、それも、「日本革命に勝利する、社共に代る大革命党」やら、「武装蜂起を領導する、単一の地下党」の「大衆」への指導——そう、「七〇年代は破防法だ——入管だ——」とか、「蜂起の時代だ——」とかいった類の御説教が、啓蒙活動が不足したからなのだろうか。

いや、一切は否である。そんな傲慢な空念仏は、もう

やめよう。そんな陰湿な悪罵の応酬は、余計混乱するだけだ。我々はこの間の救援運動の総過程を今一度視つめ直してみよう。

この間の各救援運動の前身とは、一〇・八羽田闘争の直後、多くの誹謗中傷の中にあつたその「暴徒」に対し積極的にも消極的にも、そして物理的にも精神的にもその連帯を表明せんとした、水戸殿氏を始めとした文化人市民等による「声明文」、及び「羽田一〇・八救援会」であつた。明らかにこの趣旨こそ、この意識性こそ、その後の全ゆる救援運動に波及した一筋の赤い血である。こうして、その意識性を獲得することで出発した救援運動は、六九年東大闘争を筆頭とした全共闘運動の昂揚とそれへの大弾圧を経る過程で、「武三救援会」等に見られた如く、「地域救援会運動」としてのその場所性、組織形態を獲得し、肉付けしていったのである。要約するなら、六九年三月「救援連絡センター」として体系化された各救援運動とは、「羽田一〇・八救援会」の意識性をその血とし、東大斗争以降の各地域救援会運動の場所性、組織形態をその肉としつつ、発展してきたのであつた。

さて以上のような位置と内容に於いて発展してきた各救援運動が何故この間混乱したのであるうか。

我々はその最大要因の一つを、所謂「新左翼の分解」として露呈されたこの間の冷徹たる地平に求めるものである。六七年一〇・八運動の延長上に発展してきた「新左翼」運動が、六九年秋の「安保決戦」の敗北を契機として昨今、分解再編状況にあること。その冷徹たる事実に対し、「如何なる弾圧も全人民への弾圧として……思想的信条、政治的見解を越えて……」なる理念は、果して実践的に十分対応し得るであろうか。

我々はその理念が断乎として正しいものであることを認め、支持するものである。又、六九年三月発足以降、「救援連絡センター」関係諸氏が、その理念の下に、名実ともにその物質化につとめて来たこと、そしてそうした真摯なる姿勢に対し、全面的に評価し、敬意を表するものである。

そうであるが故に、又我々はそうした理念の正しさに拘らず、所謂「内ゲバ問題」、「ノンセクト」、「過激派ゲリラ集団」等の対応に於いて現出して来たこの間の矛盾の事実を、そして看過し得ないその重大さを、味方総体の弱さの表現として痛感するものである。そして、そうした事実とその重大さに拘らず、それを意識的にも無意識的にも捨象し、理念一般を強弁せんとする一部「新左翼」の人々の言動を、その傲慢さを、その不毛さを

危惧するものである。

救援運動とは、敢えて結論付けるなら、日々寸時、名実ともに敵と武装対峙し戦闘する前線（人民の軍隊）と人民との関係の問題であり、且つそれを包括するところの人民内部の団結の在り方、及びその矛盾の止揚の在り方の問題である。

換言するなら、救援運動とは、その形式に於いて結果性（戦闘―弾圧）を媒介として出発すること。卑俗に云うなら、運動論的性格としては二次戦線の形式を呈すること。それ故この一面に於いては、前線での矛盾が、その悪しき自然成長性を媒介としながら直接的にも間接的にも人民内部の矛盾として作用すること。一方、救援運動とは、その内実に於いて、そうした結果性（戦闘―弾圧）を規定せしめた攻防関係（権力―人民）の更なる飛躍に向けたものとしてあること。それ故、理念像に非ず、真に実在像としてある人民内部の団結の在り方、及びその矛盾を、他のどの戦線よりも最も具体的に、最も全体的に、そして最も生々しいものとして表現すること。そうした形式と内実の問題として、救援運動とはその運動論としての全体性を有するのである。

ここで我々は、以上述べてきた問題点を整理する中でその解決されるべき対象を次の如く要約することが出来

化せんとするものである。我々はその作業を、我々の基本的任務である「武装闘争、及びその兵士の断乎たる防衛」の過程に於いて、具体化し実践していくものである。この間の本格的な武装斗争の胎動は、旧来の頭でっかちな「統一戦線論」を色あせたものとし、又そこで党派関係に見られたそのつばぜり合いの性格を、その陣取り合戦的性格を払拭し、新たな大同団結の方向を提示した。我々は、武装斗争、及びその兵士を断乎として防衛することの中で、その大同団結の方向に呼应し、その新たな団結の質を、旧来の「党―人民」の関係に見られた動脈硬化症状への活性化剤として、「人民の軍隊―人民」「革命戦争兵士―人民」のものへと発展拡大してゆかなければならない。そうした「武装闘争―救援」の主要二領域に於いてこそ、そしてそこで大同団結でこそ、人民内部の矛盾を正しく止揚し、より高次な人民内部の団結の在り方を実現し得るのである。

我々は、一部「新左翼」の人々のように、「破防法」を「言論の自由すらも許されなくなった」とかいいた類の「戦後民主主義の反動化」として語ったりはしない。我々は、彼らのように「破防法粉砕」とやらを、五〇年代の破防法反対闘争の延長上に於いて方針化したりはしない。

るだろう。

それは、「戦闘―弾圧―救援」として表現される時間性の矛盾を、又「救援―被救援」として表現される場所性の矛盾を、そして「党派救済―救援連絡センター―地域救援会」として表現される組織形態の矛盾を、如何に解決するかであり、換言するなら、そうした時間性の、場所性の、そして組織形態の自然成長性が生み出す矛盾を、如何なる空間に於いて如何なる主体が如何なる形で解決するか課題である。

さて、そうした課題に対し、我々は何をなすべきなのか。

我々は、中共の、インドシナの、そして中南米の我々が兄弟たちが、その血と汗の教訓の中から「戦闘―工作―生産」の三位一体を試行する中で、より高次な人民内部の団結の在り方を物質化しつつあることを知っている。我々はそうした彼らの試行とその成果の中から、多くのことを自ら自身のものとして血肉化しなければならぬ。我々はそうした視点の下に、昨今までの「戦闘―弾圧―救援」、「救援―被救援」、そして「党派救済―救援連絡センター―地域救援会」等の自然成長性を越えるべき新たな内容を、新たな団結の質を、「人民の軍隊―人民」そして「革命戦争兵士―人民」の新たな陣型として物質

「破防法」とは、その「反人民的性格」やら、その「反民主主義的性格」に於いて弾がいされること以上に、六〇年代後半での初歩的武装から本格的武装に移行せんとする人民の武装化への、その量的拡大、質的発展へのどう喝であり、人民の軍隊（及びその兵士）と人民との分断工作であり、そして「人民の軍隊―人民」の武装解除であり、そうした内容に於いてこそ最も弾がいされるべきなのである。

そのことは、五二年破防法制定に至る過程での戦後日本共産党に対する敵の山口に於いても明らかである。敵は一方の手で、戦後民主主義の下に日本共産党を合法化し、もう一方の手で、所謂「中核自衛隊の火炎ビン闘争」に表現された日本共産党の武装化への封圧を計ったのであり、そうした「合法下―反武装化」こそ、「生かさず殺さず」式の敵の常套手段なのである。

それ故、「破防法」をめぐる彼我の攻防環とは、国家の白色暴力に対する人民の武装⇄赤色暴力の正当性の認否合戦であり、且つ、白色暴力と赤色暴力との人民への、市民社会への、政治的、社会的、経済的、思想的、総オクルグ合戦なのである。そして、「破防法粉砕」闘争に於けるその獲得課題とは、「七〇年代の内乱的死闘に生き残れるような……社共に代る大革命党」とやらの防衛で

あること以上に、実体としての人民の武装化を、そしてその先駆的具体的表現である「赤軍兵士」「反米愛国戦士」等を、全ゆるその敵対と妨害の手から断乎として防衛することであり、それ以上でもそれ以下でもないのである。我々は必ずやその任務を、その最先端に於いて成すだろし、又成さねばならぬ。

最後に今一度、各戦線で闘う全ての兄弟たちへ。とりわけ、戦前―戦後の激動期に耐え抜き、今なお、不掘の活動を展開している各地域救援会の兄弟たちへ。そして大学を追われ、職場を追われ、家庭を追われ、果てなく流民として明け暮れる無名の戦士たちへ。

我々は人民の軍隊、及びその兵士を支持し、支援するための、人民による人民の救援会―赤色救援会である。

我々は、人民の戦争―人民の軍隊を支持し支援せんとする全ての人々に対し、解放されるであろう。

我々は、ここに自らを革命戦争の一翼として、誇りを持って公然と自己規定し、宣言するものである。

革命戦争兵士と人民の更なる団結を！

「赤軍兵士」「反米愛国戦士」等に愛の手を！ 救援の手を！ 支援の手を！

武装闘争（魚）の胎動に呼応し、全人民的支援網（海）

を大胆に拡大しよう！

## ☆発足に当つての原則

一九三〇年の本日、暴れ狂う白色テロルとファシズムの嵐の中で旧日本赤色救援会は誕生した。

我々は、その誕生以降、旧日本赤色救援会の歩んだ総過程に於けるその意義と限界を踏えつつ、前記趣旨の下に赤色救援会として新たな救援活動を開始せんとするものである。

我々は、その開始に当って以下をその原則とし、全ての人々にその参加を呼びかけたいと思う。

一、本会は赤色救援会と称する。

一、本会は人民の軍隊―及びその兵士を支持し、支援することを目的とする。

一、本会は政治党派の如何を問わず、本会の目的を承認し、本会の目的遂行のための活動に参加、或いは

協力する個人、及び団体をもって構成する。

一、本会は、その日常諸活動を保障し集約するための事務局を置く。そして事務局の諸活動を点検総括しその活動方針を協議するために、本会を構成する諸個人、諸団体による連絡会議を置く。

一、本会の目的遂行に伴う諸費用は、本会を構成する諸個人、諸団体の恒常的カンパでこれを賄う。

一、本会は救援連絡センターを始めとする、各救援組織、各戦線との連絡を行う。

一、本会を構成する諸個人、諸団体の氏名、名称は、一切これを非公開とする。

一九七一年八月五日

## ☆資料「解放運動犠牲者救援会

### 第二回全国大会宣言」

第二次帝国主義戦争の危機が具体的に切迫し、革命の波が全世界を襲ひ、階級闘争は今や異常な激化をもたらしてゐる。米国に端を發した深刻なる経済恐慌は、世界資本主義を根底より揺り動かし、世界帝国主義ブルジョアジーは、其の没落を一日も長引かせるために、其の全機関を動員して殖民掠奪の戦争準備と、昂揚せる革命の波の抑圧とに絶望的な努力を払っている。アジアの先兇日本帝国主義に於ては、事態は特に險惡となった。革命的労働者農民の全組織に対する弾圧は苛酷を極め、官憲の答とファシストの弾丸とは資本の権力に反抗するすべての人々を待構へてゐる。ブルジョア階級法律すらもが現在既に役に立たなくなつて居り、裁判所に代つて警察裁判が現はれ、取調に際して野蛮極まる拷問が完全に復活した。労働者農民の生活利益を擁護したがために、幾千の人々が投獄され、留置場と牢獄とは階級闘争の戦士の精神的、肉体的絶滅を企てゝゐる。

資本主義の此の断末魔的狂暴に抗し、敵の手に捕はれ

た階級戦士の利益を擁護し、その自由と権利とを防衛せんが為に、一九二八年、我が解放運動犠牲者救援会は生れ出でた。

我が救援会はその成立以来、組織的困難性と、官憲の不等極まる弾圧とも拘らず、着々其の基礎を固め、三・一五、四・一六等々、最近頻々たる検挙によって敵の手に奪はれた前衛犠牲者を始め、日常闘争犠牲者に対しても部分的ではあるが救援慰安の手を差伸べ、全プロレタリア陣営の一翼、前衛防衛隊としての我々の任務に対して、全労働大衆の支持と闘心とは潮の如く高まって来た。然しながら其の組織の微弱と、強固なる国際的指導の欠如とのため、成立以来二年の成果は未だ不十分であり、我等の前途には猶幾多の困難が横はってゐる。我々は全労働者農民運動を支持する為の、より強固な赤色後衛隊を作らんがために、プロレタリアートの統一戦線を実現するための最良の手段たるこの組織の力を、更に更に強固に結成しなければならぬ。さればこそ此の任務を遂行する目的を以て、我が救援会第二回大会は、支配階級のあらゆる集中的ブツ潰し陰謀を蹴飛ばして強力に開かれ、国際赤色救援会加盟の問題がその最も重要な議案となり、満場一致可決されたのである。大会の決議は即時実行に移されるであろう。

我々は一切の解放運動犠牲者とその家族諸君に呼びかける。勇気を失ふな！諸君の背後には数百万の労働大衆、国際赤色救援会が、そして実に第一線に我が日本の労働者農民が控へてゐるのだ。諸君が資本の牢獄につながれてゐるにも拘らず、諸君を数百万の大衆と結びつけてゐる目に見えない糸は断じて切れることはないのだ。我等の前には多難の途が横たつてゐる。だが階級闘争の犠牲者の存在する処そこには我が救援会の旗が高く翻へるであらう。而も労働者農民が世界資本との最後の戦に立上る日は目近く迫つてゐる。その時牢獄の壁は打破られ、そして諸君は我々と共に、共同の仕事のために、新社会の創造と掠奪者も抑圧者も絞首人も、存在せぬ社会主義制度の建設とのために戦ふであらう。

右宣言す。

一九三〇・八・五

解放運動犠牲者救援会第二回全国大会

振替口座  
東京

132972

もつふる社

東京都新宿区新宿2-17

TEL (352) 5876





1971, 8